

まえがき

平成21年度の春、初等教育学科29期生を迎えた。次年度は、いよいよ本学科創設30年目となる。初代学長であった武田ミキ先生の強い願いを受けてスタートした本学科は、関係各位のご尽力とご支援により、数々の成果を残し、今日に至っている。

将来のさらなる発展を考えると、これまでの歩みをふりかえり、本学科の教育の特色を著書としてまとめることが有益ではないか。私たち初等教育学科教員は、このような強い思いを抱き、各自が執筆に着手した。

本書は、直接的には1年生の「人間科学基礎演習」のテキストとして編まれている。熟読し、4年間の学びの礎としてもらうことを願うものである。書名にも位置づいている「初等教育学」。それは、幼児期から児童期にかけての教育の“理論の学”と“実践の学”をトータルしたものである。新入生諸君を、その「初等教育学」へ誘う書が、本書である。

本学科ならではの「初等教育学」である。どのような経緯で培われてきたのか。それを著したのが、「第1章 学科の歴史と伝統」である。

教育における伝統的学問分野としての教育学と教育心理学は、初等教育実践者としての資質能力形成に直結するものである。現代の初等教育の諸問題に即応し、「育心育人」という本学の教育理念とも共鳴する、本学科の教育学と教育心理学の基本的な考え方を、「第2章 逞しい初等教育実践者に求められる資質」で説くことにする。

学生として履修する授業科目では、より能動的な探究力が必要となる。講義・演習・実習・研究（卒業研究）という四種の授業形態に分かれる。それぞれの形態ごとに、特色あるもの（授業・活動）を紹介し、学生諸君の取り組みに役立ててもらおうとするのが、「第3章 4年間の授業で主体的な学びを」である。

卒業後は、公務員、企業、進学などにも向かうが、大半は小学校教員、幼稚園教員、保育士として教育現場に出て行くことになる。ここ数年のところでは、大学院や専攻科に進学し、専門性を伸ばしたり、新たな免許・資格取得をめざしたりする機会が増えてきた。このようにより高度な研究をしていこうとする

上で、あるいは実践力をさらに磨いていこうとする上で、本学科の広島文教女子大学教育学会に所属することは、大きな意味を持つと思われる。「第4章 将来を切り拓く」では、これらのことに触れることにする。

日頃の授業と教育実習への取り組みとの両立、はたまた卒業研究と各種採用試験対策との両立など、学生にとって苦しく険しい勉学生活が待ち受けている。諸先輩がここを乗り切ることができたのは、一人ひとりの強い意志力もさることながら、ともに励まし合い、高め合う仲間が存在があったからである。素晴らしい学生がいて、よき友に恵まれ、最高の仲間を作っていく。思うに、本学科でいちばん自慢できるのは、ここのことである。「第5章 学びを支える仲間づくり」で、それについて述べていくことにする。

本学の武田哲司理事長、角重 始学長には、格別のご高配をいただき、「平成21年度教育・研究活動支援プログラム」の学内版科学研究費・出版助成を賜り、本書を上梓することができた。ここに、心底より厚く御礼申し上げる次第である。

初等教育学科長 岡 利道